

3 中学生の川名さんは、小学生に「二ひきの蛙^{かえる}」を朗読することになりました。次は、「朗読する物語」と朗読するために気をつけることを書いた「川名さんのメモ」です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【川名さんのメモ】

○……朗読の仕方の工夫

▼……理由

【朗読する物語】

二ひきの蛙

新美 南吉^{にいみ なんきち}

緑の蛙と黄色の蛙が、はたけのまんなかでばったりゆきあいました。

「やあ、きみは黄色だね。きたない色だ。」

と緑の蛙がいました。

「きみは緑だね。きみはじぶんを美しいと思っているのかね。」

と黄色の蛙がいました。

こんなふうには話しあっていると、よいことは起こりません。二ひきの蛙はどうとうけんかをはじめました。

緑の蛙は黄色の蛙の上にとびかかっていきました。この蛙はとびかかるのが得意でありました。

黄色の蛙はあとあしで砂をけとばしましたので、あいてはたびたび目玉から砂をはらわねばなりませんでした。

二ひきの蛙は、もうすぐ冬のやってくることをおもいだしました。蛙たちは土の中にもぐって寒い冬をこさねばならないのです。

「春になったら、このけんかの勝負をつける。」

といって、緑の蛙は土にもぐりました。

「いまいったことをわすれるな。」

といって、黄色の蛙ももぐりこみました。

寒い冬がやってきました。蛙たちのもぐっている土の上に、びゅうびゅうと北風がふいたり、霜柱が立ったりしました。

そしてそれから、春がめぐってきました。

土の中にむもっていた蛙たちは、せなかの上の土があたたかくなってきたのでわかりました。

さいしよに、緑の蛙が目をさしました。土の上に出てみました。まだほかの蛙は出ていません。

「おいおい、おきたまえ。もう春だぞ。」

と土の中にむかってよびました。

すると、黄色の蛙が、

「やれやれ、春になったか。」

といって、土から出てきました。

○ 高く大きな声で、勢いよく一気に読む。

▼ けんかの勝負をつけることにこだわっている一方で、もうすぐ冬のやってくることを思い出して慌てているから。

○ 呼びかけるように、句読点ではっきりと区切って読む。

▼ 待ちかねていた春が来て、土の上に出てみると、けんかの相手である黄色の蛙がまだ起きていなかったから。

○ 「わすれたか」の「か」を挑発するように強く読む。

▼ 冬眠の前に「わすれるな」と言っていた黄色の蛙がのんびりと出てきたので、けんかのことを思い出させようとしているから。

▼ 「去年のけんか、わすれたか。」

と緑の蛙がいました。

「待って待って。からだの土をあらいおとしてからにしようぜ。」

と黄色の蛙がいました。

二ひきの蛙は、からだから泥土をおとすために、池のほうにいきました。

池には新しくわきでて、ラムネのようにすがすがしい水がいつばいにたたえられてありました。そのなかへ蛙たちは、とぶんとぶんとびこみました。

からだをあらってから緑の蛙が目をばちくりさせて、

▼ 「やあ、きみの黄色は美しい。」

といました。

「そういえば、きみの緑だってすばらしいよ。」

と黄色の蛙がいました。

そこで二ひきの蛙は、

▼ 「もうけんかはよそう。」

といいあいました。

よくねむったあとでは、人間でも蛙でも、きげんがよくなるものであります。

(新美南吉「二ひきの蛙」による)

一 この物語について説明したものととして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 二ひきの蛙が協力して困難を乗り越える様子を、音を表す言葉を用いてリズムよく書いている。
- 2 二ひきの蛙が人も蛙も同じ生物だと悟る様子を、動作を表す言葉を用いて客観的に書いている。
- 3 二ひきの蛙が友情を再確認していく様子を、緑の蛙の立場から話し言葉を用いて書いている。
- 4 二ひきの蛙がけんかをして仲直りする様子を、会話を多く用いて平易な言葉で書いている。

二 この物語に描かれている季節を、次の1から4までの中からすべて選びなさい。

- 1 春
- 2 夏
- 3 秋
- 4 冬

一

④

二

①
③
④

三

○

高	例
く	さ
く	わ
大	や
き	か
な	な
声	気
で	分
読	が
む	伝
。	わ
	る
	よ
	う
	に、



し	体	土	例
た	だ	を	緑
か	け	洗	の
ら	で	い	蛙
。	は	落	も
	な	と	黄
	く	し	色
	気	て	の
	持	き	蛙
	ち	れ	も
	も	い	池
	さ	に	の
	っ	な	水
	ぱ	り	で
	り	、	泥